



世界SFパロディ傑作選
風見 潤・安田 均編
講談社
(文庫・6/15刊・¥440)

パロディという言葉は、編者後書きにもあるとおり、日本で比較的広い意味にとらえられている。本書でも、きわめて広範囲の、SFパロディが収録されている。

原典に対する、オースドックスなパロディ「スーパーマン症候群」「レンズマン裏舞台」「昇華世界」(バラードの濃縮小説コンダラント・ノヴェルに対するパロディ)等の中でも、アンダーソン&デイクスの「ホーカミの群れ」(これは、よく知られたホーカ・シリーズの一編で、設定の勝利)や、ソマーズIII世(ファーマーのペンネーム)の「スカレーティンの研究」(犬のホームズの物語)は、やはり面白い。

ただ、「パロディ」という名称が、誤解を与える作品もある。例えば、「暗殺者たち」のような連作の一編や、「昏い世界を極から極へ」などは、それ自体、独立した内容を持っているからだ。もっとも、SFパロディという、かなり無理な制約が課せられている以上、ある程度はやむを得ないだろう。

全体的に見て、よくできたアンソロジーである。しかし、もしこれを二集、三集と編んでいくのなら、どういう性格を与えるかが、今後の問題となるはずだ。